

標本室管理の現状

横山謙二



写真1：バックヤード1F廊下のカビ

博物館の利用者の多くは、展示室と展示物を評価します。そのため、多くの博物館では展示室の見栄えや展示物の珍しさなどを重視した展示が行われます。しかし、元来自然史博物館の展示室は、研究によって明らかになったことやその研究に関する標本を展示することで、自然史に関する情報を多くの人たちに提供する目的があります。そのため標本室には、まだその価値が明らかになっていない標本や、これまでの研究の証拠となった標本を保存しておかなければなりません。

そして、そのためには、これらの標本の価値を明らかにすることができ、適切に保存する知識・技術を持つ学芸員が必要です。標本がなくて研究できず、新たな情報を発信できず、そして展示する標本もないとなると、もはやそこは博物館ではなくなってしまうのです。ですからバックヤードと言われる標本室と研究室こそが、博物館をささえているところであり、標本を守るための標本室の管理は、集客よりも重要な博物館の仕事なのです。

ここ、ふじのくに地球環境史ミュージアムの標本室にも、多くの標本が集められ、その中には研究され、その価値を見出された貴重な標本も数多くあります。しかし、ミュージアムがオープンして3年間、標本室の防カビ・防虫対策は不十分で、バックヤードの廊下はカビだらけで（写真1）、空調のない岩石・化石標本室にもカビが大量に発生したこともありました。そして、搬入時の燻蒸も十分にできていません。これでは、いつ貴重な標本



写真2：岩石・化石標本室のデータロガー

が失われてもおかしくありません。

こうした現状もあり、ミュージアムでは今年から、やっとIPM（Integrated Pest Management、総合的有害生物管理）を導入しました。IPMについては、この会報でも以前にとりあげています（56号P3-4、39号P3-4）が、簡単に説明しておきます。

IPMは、もともと農作物を有害生物から守る手法として始まったもので、博物館では、標本室・展示室などの標本・資料のある場所で、標本害虫・カビによる被害がないことを目指し、建物内の有害生物を制御し、その環境を維持することを目的としています。それには、日常的な点検やトラップによる調査が欠かせません。

現在ミュージアムでは、防カビ対策として各標本室にデータロガー（湿度・温度計測用、写真2）と、除湿機（液浸標本室を除く）を設置しています。この除湿機は、タンクに貯まった水を定期的に捨てなければなりません。始めは、どのぐらいで水が貯まるかわからず、不定期に気が付いた時に捨てる程度でしたが、しだいに短期間に水が満水になることがわかり、梅雨時から夏にかけて、毎日点検するようになりました。特に、1階の標本室はひどく、ほぼ毎日、タンクに貯まった水20ℓを排水しなければなりません。岩石・化石標本室は、空調がないので、湿度が高くなり、毎日排水を行ってもなかなか65%（カビの発育しにくい湿度）以下になりません。そこで、タンクに排水する管に、ホースをつなぎ、シンクに直



写真3：岩石・化石標本室の除湿機

接排水するようにして24時間可動するようにしました(写真3)。その結果、今では65%以上になる日がほとんどありません。ただ室温は常に20℃以上で、カビが发育しやすい温度が保たれた状態です。今後、目視点検でカビの発生が確認された場合は、除湿機の増設や空調を設置するなど対策をしなければなりません。

防虫対策としては、標本害虫侵入経路と現在標本室の状態を把握するため、トラップを設置し観測することにしました。このトラップによる調査は、会報56号P3-4でもとりあげました歩行性昆虫用トラップを中心に、植物標本室周辺には飛翔性昆虫用トラップ(写真4)を設置しました。設置場所は剥製や昆虫、植物標本などの乾燥標本室内と一部の展示室、バックヤードへの出入口周辺です。5月にトラップを設置して、毎月1回の見回りをしています。これまでのところ、標本室内では標本に加害する恐れのある害虫は、ゴキブリを除き見つかっていません。しかし、玄関はひどいもので虫が



写真4：飛翔性昆虫用トラップ

入り放題です(写真5)。幸い標本害虫に相当するようなものは、ほとんど入っていませんが、早急に対策を行う必要があります。

以上が、現在のミュージアムの標本室を含むバックヤードの現状です。これからは、調査点検の結果をふまえ、効果的な対策を行い、より良い保存環境を維持して行くために、施設整備や日常管理をしていかななくてはなりません。施設整備については、ある程度の予算がかかりますが、日常管理に関しては、ゴミの出し方や扉の開け閉め、こまめな清掃などここで働く人・来館者すべての意識と行動が重要です。標本は、自然科学の研究にとって、重要な証拠であり、そして何年もの永い期間の変化をへてその重要性が明らかになることもあります。それだけに標本を保存する標本室の環境維持をしていく仕事は、博物館にとって最重要な仕事なのです。数十年後、数百年後の未来に現在の標本を残していくために、みなさんのご理解・ご協力をお願いします。



写真5：バックヤード入口に設置した歩行性昆虫用トラップで捕まった虫